社会知性の開発をめざす 専修大学

ニュース専修 ウェブ版

2006年11月号

[3面]

文学部誕生40年 公開講座も40歳に

“藝能の世界” 3教授が講演 人形劇団「結城座」講演も

「伝統と創造—藝能の世界—」をテーマに文学部公開講座が10月15日、生田キャンパスで約150人が参加して開催された。今年は文学部創立40周年。社会への「知の発信」として創立年から始まった同講座も40回目。節目にふさわしい3教授の講義と伝統芸能の公演が行われ、有意義な講座となった。（専修大学創立130年記念事業）

矢野建一教授（文学部長）

青木美智男教授

矢野建一文学部長のあいさつの後、青木美智男教授が「『平和な時代』の文学・芸能を考える」を講演。二百数十年にわたって戦争のない、「無事の世」が続いた江戸時代は、強固な身分制からくる職分制国家で、独特の文化が生み出された。大坂の陣から100年、さらに200年、それぞれの時期に開花した元禄文化、化政文化の文芸や芸能に焦点を当て、江戸時代の様相を解きほぐしていった。

小林恭二教授

末廣幹教授

次に登場したのは小説家としても活躍中の小林恭二教授。日本独自の奇妙な風習である「心中」、その言葉の発祥となった大坂で起きた曽根崎心中（元禄16年＝1703）を取り上げた。近松門左衛門により作品化された遊女と手代との劇的な心中を機に、現在に至るまでこの“風習”は後を絶たない。心中の持つ本来の意味を検証しながら曽根崎心中が熱狂的に迎えられた背景と、純粋な「愛のための」男女の死が、現世からの逃避の死に展開していったのはなぜかを探った。

末廣幹教授は「ピュグマリオーン神話の変貌—シェイクスピアからミュージカルまで」について。ヨーロッパ文学や芸術には、男性が自分の理想とする女性を作り上げるモチーフを持つ神話を基にした作品が数多い。その代表、シェイクスピアの『じゃじゃ馬ならし』とミュージカル『キス・ミー・ケイト』を比較、時代の変化と共に神話がどのように再創造されていったかを映像も使って展開した。

▲結城孫三郎さんの指導で来場者も実演

最後は会場を9号館アトリウムに移し、370年の歴史を持つ江戸糸あやつり人形劇団「結城座」が公演。演目は「寿獅子」「本朝廿四孝奥庭狐火の段」。十二代目の結城孫三郎さんの見事な糸あやつりから生まれる繊細な人形の演技に、会場からため息とともに大きな拍手が寄せられた。

公演のあと、同劇団の歴史や人形の操作法が説明され、写し絵を使うなど独自の舞台空間を創造し、海外公演にも積極的な同劇団の旺盛な活動が紹介された。孫三郎さんの指導による希望者の実演も行われ、参加者は日本の伝統芸を堪能した。図書館では、関連の書物や資料が展示された。

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

ニュース専修 ウェブ版
2006年11月号
[3面]

社会科学研究所主催「日中公開シンポジウム」

生活、若者、就職など「中国の現代（いま）」を検証

11月4日、神田キャンパスで専修大学創立130年記念・日中公開シンポジウム「中国の経済・社会の現在（いま）」が行われた＝写真。

主催した社会科学研究所の柴田弘捷所長は「当研究所では中国の経済に強い関心を持って研究に取り組んできました。今回は特に社会や生活にスポットをあて、中国の現在を知る、把握するため活発な議論を期待します」とあいさつ。日本側から本学の大倉正典経済学部助教授、伊藤恵子同助教授、福島大学の菅沼圭輔教授が、中国の金融事情、日系企業の動向、農業・農村事情について論述。中国側からは、上海社会科学院の孫克勤・社会学研究所副所長、楊雄・社会発展研究院副院長、北京大学の楊善華教授が、中国の就職事情、上海の若者事情、現代の家族事情を解説した。

最後に、本学の宮嵜晃臣経済学部教授、野部公一同教授、柴田所長（文学部教授）、広瀬裕子法学部教授がコメンテーターとなり、各発表を総括。参加者からも積極的に質問が寄せられ、「中国」に対する高い関心がうかがわれた意義あるシンポジウムとなった。

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

ニュース専修 ウェブ版

2006年11月号

[3面]

素形材産業ミニシンポ

川崎市と共催、交流の場に

▲多くの企業の方が熱心に聴講

日本の産業基盤を支える素形材産業に焦点を当て、今後の同産業の可能性やイノベーションの促進に与える影響などを探る「素形材産業ミニシンポジウム」（共催＝社会知性開発研究センター／都市政策研究センター、（財）川崎市産業振興財団）が10月25日、川崎市高津区のかわながわサイエンスパークで行われた。

川崎市内の関連業者や学生など75人が出席。冒頭、司会の宮本光晴本学経済学部教授が「大学生ではなく、川崎市内の企業の方を対象としたシンポジウムとして企画しました。各企業の交流の場としても活用していただきたい」と開催趣旨を説明。都市政策研究センター代表の平尾光司本学教授のあいさつの後、前田泰宏・経済産業省製造産業局素形材産業室長が国策の観点から支援政策を、（株）山崎機械製作所の山川恵則・常務取締役工場長が企業の視点から技術継承や人材育成への取り組みを、（株）イスマンジェイの渡邊敏幸・代表取締役社長が川崎のインキュベーション施設を利用した新素材開発の様子を、それぞれ講演した。

※ 素形材…金属やプラスチックなどの素材に熱や力を加え、形成された部品や部材のこと。

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

社会知性の開発をめざす 専修大学

ニュース専修 ウェブ版

2006年11月号

[3面]

歴史学研究センター公開講座

フランス革命 啓蒙思想の影響探る

▲左から司会の田中正敬助教授、山崎氏、ムカージー氏

公開講座「フランス革命とヨーロッパ」（社会知性開発研究センター／歴史学研究センター主催）が10月7日、神田キャンパスで開催された。講師はいずれも社会知性開発研究センター客員研究員で、啓蒙思想に焦点を当てた山崎耕一氏（一橋大学社会科学古典資料センター教授）とフランスで革命が起きた当時の必然性を探ったリラ・ムカージー氏（インド、ジョドプル大学助教授）。120人の聴講者は熱心に講演を聴いた。

山崎氏は「サン＝ジュストとフランス革命」。ロベスピエールらと共に革命活動に身を投じた若き革命家サン＝ジュストとその著作『フランスの革命と憲法の精神』の分析を通し、革命家たちがいかに啓蒙思想の影響を受けたかを明らかにした。

ムカージー氏は「ヨーロッパ史におけるフランス革命の諸条件」について講演。革命前のフランスの状況と他のヨーロッパ諸国の状況を比較考察し、ヨーロッパ史におけるフランス革命を政治、経済、社会、国際関係などさまざまな角度から探り、なぜ革命がフランスで起きたのかを分析。啓蒙思想の実践、浸透により社会が一つの政治勢力となり、国家と社会の分離が同革命の重要な前提となったと説いた。

当日は、講演のほかに質疑応答の時間も設けられ、会場から両氏に活発な質問が寄せられた。

今回は03年度採択のオープン・リサーチ・センター整備事業「フランス革命と日本・アジアの近代化」の4回目の公開講座。11月18日（土）には、生田キャンパスで第4回国際シンポジウム「アジアの近代とフランス」が開催される。

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

ニュース専修 ウェブ版
2006年11月号
[3面]

ネットワーク情報学部・江原プロジェクト

「SPSS Open House研究奨励賞」学部生の部で優秀賞

江原淳ネットワーク情報学部教授のプロジェクトが、統計解析ソフト「SPSS」を用いた研究奨励賞に応募し、見事、学部生の部での優秀賞に輝いた＝写真。10月25日には東京ドームホテルで表彰式が行われ、代表の田中晴基さんがプレゼンテーションを披露した。

（株）インテージが協賛するこの賞は、日ごろの研究成果を各界の専門家が評価し、ビジネス界と交流を図ることを目的とし、入賞者には今後の研究を奨励する賞金と副賞が授与される。

「データ解析コンペで入賞しよう」という江原教授のプロジェクトに集まった3年次生9人が「顧客データのマイニングによる小売管理の改善・提案」をテーマに「ドラッグストアにおけるLTV向上策」を論文にまとめた。新規顧客の獲得、既存顧客の維持率向上、購買回数の向上、購買単価の向上の具体策を提示し、審査員からは「LTV向上の具体策について分析の結果から明確に述べられており、分析法、表示法についても適切。学部生としては大変優れた研究」と評された。

代表の田中さんは「二つのチームの研究を一つにまとめるところに苦労したが、結果に結びついた喜びは格別。プレゼンの際に指摘された点を反省し、一人ひとりが『分析のゴール』をイメージして研究を進めていきたい」と話した。

指導にあたった江原教授は「学生たちはよく頑張った。こうしたコンペでは研究の目的がしっかりしていて、データの獲得に工夫があり、正しく統計処理をしていることが肝要。さまざまなデータを容易に入手できる現代こそ、果敢にチャレンジしてビジネスチャンスを見つけてほしい」と話している。

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.